# １　ながいも産地の維持に向けた若手生産者の技術力向上
## ～研修と生産技術チェックシートによる技術改善～

【概要】
- 若手生産者の技術力向上に向けて、ながいもの施肥体系が形状に及ぼす影響や排水対策等について学ぶことにより、技術改善に前向きな姿勢がみられた。また、「チェックシート」の活用により個別の生産技術の状況確認と改善を促した。

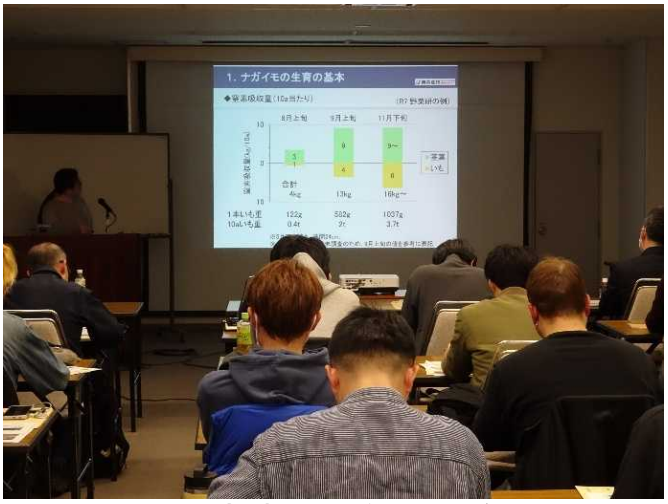
【背景・課題】
- ながいも産地を維持していくためには、担い手となる若手生産者の育成が重要である。
- 令和２年度に若手研究会会員を対象に行ったアンケート調査では、栽培面の課題として品質の向上、収量の安定化が挙げられており、基本技術の徹底と種苗更新の意識付け、個々の生産技術のレベルアップが不可欠である。

【普及指導活動の内容】
- 昨年度の担い手育成塾において、野菜研究所職員を講師にながいもの施肥体系が形状に及ぼす影響や追肥判断及び排水対策について座学研修したところ好評だったため、今年度はＪＡ八戸及び野菜研究所と連携して、10月15日に野菜研究所においてＪＡ八戸ながいも専門部全体を参集範囲とした現地研修会を開催した。
- 担い手育成塾研修会を２月20日に八戸市のユートリーにおいて開催した。令和７年産の振り返りと令和８年産の高品質多収に向けた座学研修を行うとともに、参加者がチェックシートにより自己評価を実施した。

【成果】
- ながいも専門部の現地研修会には29名が参加し、そのうち若手生産者は10名であった。参加者は、コブや溝などの障害いも対策や排水対策について質問し理解を深めていた。
- 担い手育成塾研修会は若手生産者16名が参加し、追肥に関する質問が出され、生育を見て追肥時期が遅れないようにすることや８月上旬の茎葉の繁茂状況を確認して肥料を切らさないことが重要であると理解された。
- 生産者14名が「チェックシート」により自己評価を行い、11名の技術の改善を確認した。主な改善内容は、病害虫防除５名、輪作４名、適期追肥３名、排水対策及び優良種苗の導入が各２名であった。

【対象名】
八戸農協野菜総合部会
　ながいも専門部
　　ながいも若手研究会（49名）

ＪＡながいも専門部の研修会（10/15）



担い手育成塾研修会（2/20）

積極的に質問する参加者（同上）

## ２ 高品質りんごの安定生産に向けた交信かく乱剤の普及拡大

【概要】
- りんごの害虫対策が困難になることが想定されている中で、県では交信かく乱剤を令和６年病害虫防除暦に採用したが、現場での設置率が低いことから、ＪＡ八戸と協力して効果や設置方法等についての調査、周知を行った。

【背景・課題】
- 夏場の高温の影響や一部の殺虫剤で登録更新が行われないなど、今後、殺虫剤のみでの害虫防除が困難になることが予想される。
- 令和６年に交信かく乱剤を県の防除暦に採用したが、設置の必要性や、効果、正しい設置方法が周知されていない。

【普及指導活動の内容】
- 交信かく乱剤を普及するとともに必要性を周知するため、講習会を実施し、フェロモントラップを三戸町梅内及び五戸町倉石に設置して発生消長を調査した。
- 交信かく乱剤の使用方法を周知するため、両地区に交信かく乱剤展示ほを設置し、展示ほを活用して設置実演会を行った。
- 対象害虫の発生消長調査で高い交信かく乱効果が確認されたことから、結果を取りまとめ、講習会や防除暦検討会等で説明した。

【成果】
- ４～５月にかけて講習会を行い、病害虫の適正防除と交信かく乱剤の必要性について説明したところ、概ね理解され、前年よりも交信かく乱剤の設置面積が増加した。
- 交信かく乱剤設置展示ほにおいて、設置実演会を実施した。設置方法の説明の後、参加者が実際に交信かく乱剤を設置し、取り付けが意外と簡単だと話す生産者がいる一方で、効果が切れた剤の撤去が大変と感じている生産者もいた。
- 発生消長調査を農協と一緒に行い、情報を共有し、調査結果を９月の講習会や防除暦検討会等で説明し、効果について周知を行った。また、各共防の防除暦作成会等でもトラップ調査の結果を示しながら、来年度の交信かく乱剤の導入を呼びかけたところ、防除暦へ新たに交信かく乱剤を採用する共防や継続設置する共防があるなど、交信かく乱剤の設置の必要性が理解された。

【対象名】
管内共防地区連（39組織）
管内りんご生産者

設置実演会での説明（5/15）

栽培講習会での説明（9/9）

病害虫防除暦解説講習会（2/3）

# ３ 三八型農業経営改善モデルの創出

**【概要】**

- 農業経営力の向上に向けた改善活動を伴走支援し、管内の地域経営体等の所得向上を図るため、様々な経営改善を通じた経営力の強化により、課題解決につながるモデルを実証した。
- 都市部の大企業等で働く副業人材を活用した新商品の開発や大都市向け営業による売上増などに取り組む「副業人材活用モデル」を実証した。
- 首都圏在住者などの農作業を手伝う人材の受け入れによる労働力確保や地域交流に取り組む「都市農村交流推進モデル」を実証した。

**【背景・課題】**

- 三八地域の経営体が今後所得の向上を図り、持続的に発展していくためには、規模拡大に必要な労働力の確保等による効率的な営農が重要となっている。
- 経営課題の解決に取り組む経営体を確保し、育成するほか、取組事例を普及させていく必要がある。

**【普及指導活動の内容】**

- 副業人材活用モデルについて、１経営体を対象に、経営課題を整理するとともに課題解決に向けた伴走支援を行った。
- 都市農村交流推進モデルについて、管内の３経営体を対象に、新たな労働力の受入に向けた伴走支援を行った。
- ２つのモデルの取組事例について、管内の農業経営士や青年農業士等に周知した。

**【成果】**

- １経営体が副業人材を１名雇用し、新商品の開発と販売に取り組んだ結果、１品が商品化に向けた最終調整段階となり、今後の販売戦略について多くの助言を得た。
- ３経営体が、「おてつたび」を活用し、延べ８名の旅行者を受け入れて、農繁期の労働力を確保することができた。
- 取組事例を管内のリーダー農家へ周知したことで、課題解決に向けた新たな手法をＰＲすることができた。

**【対象名】**

地域経営体（129経営体）
地域経営体候補

副業人材とのオンライン会議（1/5）

旅行者募集サイト作成（8/5）

旅行者のにんにく植付作業（10/3）

# ４ 次世代につながる産直組織の運営体制強化

【概要】
- 五戸町にある産地直売所「ふれあい市ごのへ」は、町の支援を受けず自立した組織として活動していくため、専門家と連携した法人化検討会等を実施し、「株式会社ふれあい市ごのへ」の設立に至った。
- 新たな法人においては、新規事業としてPOSレジデータを活用した経営改善の実施、新規会員の獲得、地域貢献活動の開始などを行い、体制の強化につながっている。

【背景・課題】
- これまで、五戸町から指定管理を受け活動してきたが、町の支援を受けずに自立した組織として活動していくため、組織運営体制の強化に向け、法人化することとなった。
- 会員数は開設以来約60人を維持していたが、現在は52人にまで減少しており、次世代を担う人材の育成が急務である。

【普及指導活動の内容】
- 税理士や司法書士、社会保険労務士、中小企業診断士等の専門家と連携し、事業計画や定款の作成を支援した。
- POSレジデータを活用し、３回のトライアル期間を設け、販売目標設定、対策等を検討、実施、実施後の検討を支援した。
- 収支計画の作成を支援し、手数料収入の試算から新規会員獲得の必要性を明らかにした。
- 夏場の高温対策等の産直向け野菜の栽培講習会や、漬物加工講習会を開催した。
- 地域貢献活動として子ども食堂の代表者を紹介し、食材提供の話し合いを進めた。

【成果】
- 定款作成や事業計画作成など着実に準備を進め、法人化することができた。
- データに基づく販売計画作成、出荷依頼、販売の工夫、実施結果分析のサイクルが定着しつつある。
- 新規会員獲得の必要性を理解した役員等が中心になって声がけを行い、新たに10名が加入した。
- 役員が子ども食堂との話し合いを進め、９月から食材提供が開始された。

【対象名】
ふれあい市ごのへ会員（52人）

事業計画の検討（7/10）

全体会議で販売目標を共有（8/8）

建物の譲渡セレモニー（7/1）

# ５ 産地の刷新に向けた「たっこにんにく」の振興

【概要】
- 田子町オリジナル品種「たっこ１号」の生産性向上のため、気候変動や病害虫対策に関する講習会を開催し、栽培管理技術の周知を図った。
- 先輩生産者の技術や経験を若手に継承するため、生産者同士が交流し、若手を育成する場の必要性を確認した。

【背景・課題】
- 「たっこにんにく」は、品質の良いにんにくの産地として県内外で評価されてきたが、生産者の高齢化が進み、担い手の確保と若手生産者の育成が課題である。
- 町オリジナル品種「たっこ１号」の高品質安定生産技術が確立されておらず、生産者数や出荷量が伸び悩んでいる。

【普及指導活動の内容】
- 良品生産のため、６月中旬にケーブルテレビで適期収穫の呼びかけを行った。
- イモグサレセンチュウ（以下、線虫）対策技術講習会（８月）、気候変動や虫害対策技術に関する講習会（２月）を開催し、管理技術のポイントを指導した。
- 「たっこ１号」の高品質安定生産に向けた現地試験の実施を支援した。
- 若手生産者の意見を聞き（11月）、先輩生産者に対し、生産技術の指導を希望する内容をつないだ（12月）。

【成果】
- 適期収穫を呼びかけたことで、約８割のほ場で６月中に収穫を終え、品質確保が図られた。
- 線虫対策技術のチェックリストを作成・配付し、生産者自身が被害低減技術の実施状況を確認できるようにした。引き続き、次年度の収穫前に、生産者にチェックリストを配付し、実施について確認する。
- 「たっこ１号」現地試験では、慣行の緑マルチに対して黒マルチの使用による収量・品質（割れ）に明確な差は認められなかった。おんぶ症については、施肥量が多いほ場で発生率が高まる傾向であることを生産者に情報提供した。
- 先輩生産者の間で、若手と世代間交流して技術や経験を継承することの必要性が共有された。

【対象名】
美六姫生産者の会（43名）

夏期講習会（8/29）

若手生産者の意見を聞く会（11/20）

冬期講習会（2/17）